

風姿花伝第一、 年来稽古条々

三十四五

この比ころの能さか、盛りの極きはめな
り。こゝにて、この条々を
究きはめ悟さとりて、堪かん能のうになれ
ば、定さだて天下ゆゑに許ゆるされ、名めい
望ぼうを得えつべし。若もし、この時
分に、天下の許ゆるされも不足
に、名望めいぼうも思程おもふほどもなくば、

〔口訳〕

此の時代の能は、一生涯の中で盛りの絶頂である。この際に、この花伝書に説く所の条々を究め悟つて、堪能の域に達すれば、定めて天下に名人として許され、名望を博する事が出来るであらう。若し此の時分に、天下の名人と許される事も出来ず、世間的名望も思ふほどでなければ、たとひ如何なる上手でも、まだ真の花を究めて居ない為手だと悟るべきである。若し真の花を究めて居ない者だつたら、四十以後からは能は下るに相違ない。即ちこれ、後になつてあらはれる証拠（花を

如何なる上手なりとも、未^{いまだ}
真^{まこと}の花を究^{きわ}めぬ為^{して}手と知^しる
べし。若^もし究^{きわ}めずば、四十
より能^なは下^さがるべし。それ
後^{のち}の証^{しょう}拠^こなるべし。さる程
に、上^あがるは三十四五まで
の頃、下^さがるは四十以来な

究めてゐない証拠）であるといふべきだ。かやうな訳で、能の上達するのは、三十四五までの時代、下るのは四十以後である。くどく言ふやうだが、此の三十四五で天下の人々から名人として許されなかつたならば、能を究めたなどと思つてはならない。ここで尚十分に自己をつつしまねばならぬ。即ち此の時代は、今まで習得した芸能を完全に我がものとし、又今後の手立をもさとする時分である。この時分に花を究めなければ、これ以後に天下の許されを得ることは、それは到底不可能であら

り。返^{かへ}々^{ずぐ}、この頃天下の許^{ゆる}
されを得ずば、能を極めた
りとは思^{おも}ふべからず。此^こ所^ゝ
にて尚^な慎^{つゝし}むべし。此^この比^{ころ}は
過^おし方^ほを覚^{おぼ}え、又^ゆ行^く先^{さき}の手
立^だてをも覚^さ時^し分^{ぶん}なり。この
頃^{きは}究^きめずば、この後^{のち}天下の

う。

許^{ゆる}されを得んとの事、返々^{かへすぐ}

堅^{かた}かるべし。

〔評〕

三体物真似の始の二十四五歳から約十年の鍛錬工夫を経て、能に於ける極盛の時代が来る。この時代の仕事は、「真の花を究める」といふ一点にある。それは芸の鍛錬と、花を咲かすべき工夫をきはめるにある。花伝書に記す所の条々を究め悟るは、工、夫を究めてこれを自悟するのである。堪^{かん}能^{のう}は芸の鍛錬修行の結果の方である。この両者は、「能と工夫

の究まりたる為手」たるためで、その結果は真の花を獲得するのである。かくして天下に許され名望を得るのである。

真に花を究めてゐるや否やは、何によつて判ずるかといへば、世人に許され名望が高くなるか否かで判ずるといふ。ここに芸道の面白さがある。一寸考へると、世人の批評や名望などといふものは、そんな判定の標準にはならないもののやうにも考へられるが、実際は、世阿弥のこの言葉は千載の真理だと思ふ。歌舞音曲や芝居などは、瞬時にして消えてゆく芸である。知己を百年の後に俟つといったやうな文芸や造形芸

術とはその点で非常なちがひである。文芸や絵画でも、当時に認められないで後世に認められるなどといふ例は、稀有である。名人上手であれば、生存時代に名望を得るといふのが当然であらう。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『世阿弥十六部集評釈 上巻』能勢朝次 著

欠ページ補填…同書別版